

## 第4節 A supplementary explanation

——学ぶこと、そして私にとって奇跡の人サリバンについて

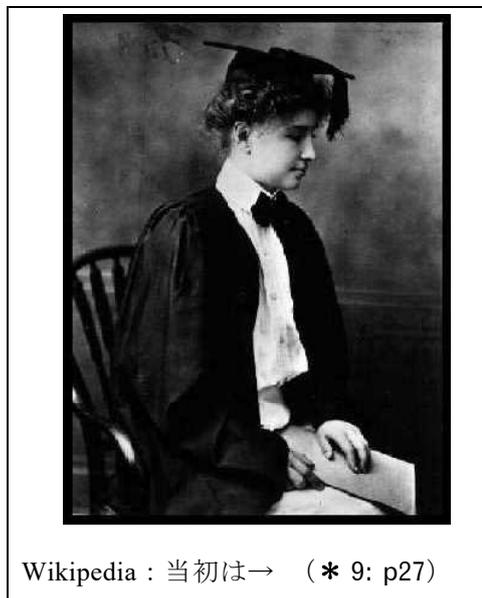
### 《◆-1：再度『学ぶ』ということについて》

この11章「Helen Keller」では、「人間が人間になるためには、言語その他の基本的な生活習慣や人間となるための文化を学ばなければならない」ことの重要性を、(人間文化の一つとしての)言語を取り上げ、問うた。

そのことをより明確にするため、もう一度ヘレンケラーが言葉を覚える前後を比較する。

第3節 My favorite words ①に引用したように、ヘレンケラーが言語の存在を知らなかったときには、何でも自分の思うようにしなければ気がすまず、食事のときには誰の皿にでも手を突っ込み、欲しいものは手づかみで取り、そして少しでも自分の思うままにならないときには大暴れをした。

またあるときは妹をゆりかごからつき落とし、あわや死を伴うような大怪我をさせかねないということさえしていた。



しかし、言葉を覚えた後のヘレンケラーは My favorite Words ③ ④に書いたように、懸命に学び有名大学に合格し、5カ国語以上を学び、数箇国語をマスターする。だが、第1節で書いたように、そのこと自体の価値はいかほどであろうか。ヘレンケラーが言葉を学ぶ中で、私が注目したのはささいなことかもしれないが、言葉を覚えてからしばらくたった幼いときの一枚のセーターについての話である。以下関連部分を引用するので読んでもらいたい。

「あるときヘレンは、いちばん好きな手ざわりのいいふわふわしたセーターを着て、よろこんでいたが、『ヘレンや、かわいそうな小さな女の子がいるんですよ、この寒いのに着るものがないんです。あなたの洋服のどれか一枚やりませんか。』と母にいわれると、『ええ、わたし、その気の毒な子に、これをあげます。』といって、セーターのボタンをはずしはじめた。『でもそれは、ヘレンのいちばん好きなセーターではありませんか。』母はほかのでもいいと思ってそういった。するとヘレンは、『それだからこれをあげるのです。わたしがこんなに大好きなセーターだから、その子もきっとわたしみたいによろこぶと思います。』といいながら、そのたいせつなセーターをさっさとぬいでさしだすのだった」 (\*12: pp156-158)

人間にとって学ぶことの重要性についてはこの記述で十分であろう。もし彼女の母親だったなら、ヘレンケラーが何箇国語もマスターしたり、有名大学へ入学したりしたことと、荒れ狂っていた彼女が言葉を学ぶことにより、こうした気持ちを持つようになったことのどちらを喜ぶであろうか。私にとって「学ぶ」という意味はここにあるように思われる。そして、私の目指そうと思う英語の授業のヒントもここにある。

彼女は、後に自分の生涯を、困難を抱えた人々に捧げた。だが、もう一つ注目してもらいたいものがある。それは私が引きつけられ、是非取り組みたかったサリバンである。最初、目も見えず、耳も聞こえず、ものも言えず、言語の存在も知らず、光を求め続けたヘレンケラーにとって救いとなったのはこのサリバンである。もしサリバンがいなければ、……。サリバンは文字通り格闘を通してヘレンに言葉を教えていった。正確には**言葉を教えるために「心を通し、心を伴った言葉を教えるようになっていった**。後日ビデオで『Miracle Worker』(\* 20)を上映するのでそのときにサリバンに注目してもらいたい。

## 《◆-2 : 私にとっての奇跡の人－ Anne Mansfield Sullivan》

映画『Miracle Worker』の中でサリバンはある本を読む。

「The blind, deaf, mute woman. Can nothing be done to this human soul? The whole neighborhood would rush to save her if she were buried alive by the caving-in of a pit and labor with zeal until she were dug out. Is the life of the soul of less important that of the body?」

(この目も見えず、耳も聞こえず、口もきけない女性。この人間の心を掘り起こすために、なにもしてやることができないのであろうか？もし彼女が陥没した穴に生き埋めになったとしたら、周囲の人々が救出にかけつけて……親身になって掘り出そうとするものを。精神の生命はそれよりも重要ではないのであろうか？) (\* 11: p88-89) 関連 (\* 10: p73)

そしてサリバンはいろいろ試行錯誤を重ねこうつぶやく。

「Now all I have to teach you is — one word. Everything.」 (\* 10: p96)

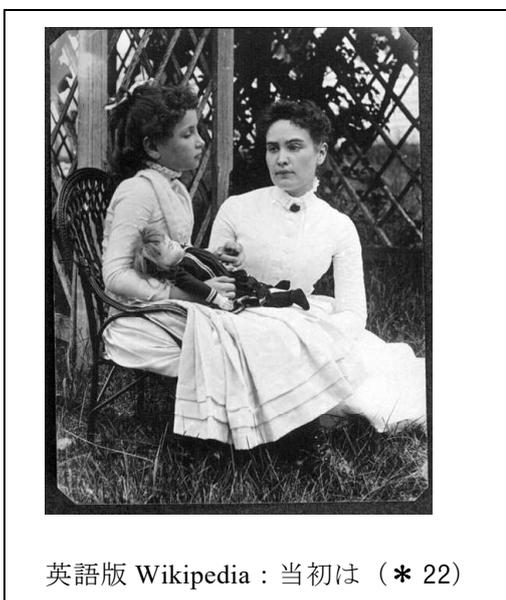
{【浜田訳例】今私あなたがあなたに教えなければならない唯一のことは——、一語なの。それが全てなの}。

この後サリバンはヘレンに言葉を教えるため文字どおり格闘をする。その凄まじさについてはビデオ『Miracle Worker』上映のときにじっくり見てもらいたい。

やがて第3節の ③ Light - 2:water でみたようにヘレンは言葉の存在を知る。かの有名な Water のシーンである。

その後もサリバンは休むことなくヘレンに教え続ける。ヘレンは自伝にこう書いている。

「人形のそばに（文字の）『寝台』『上に』『ある』と並べて、文章を作ると同時に、文章の意味を実物で実行して見せました。……遊んでいるつもりでありました。……文法をこつこつ勉強する苦しみや、むずかしい計算や、さらにいっそうむずかしい定義など、多くの子供がこわがるものが、私には今日いちばん楽しい思い出の一つになっています」 (\* 5: pp39-40)。また自然の中で「よく戸外で読書したり勉強したものです。……こうした物の美しさが、物の役立ちを私に教えました」 (\* 5: p41)。



波止場での小石や堰<sup>せき</sup>を使っての地理の勉強や生き物をとおしての勉強（「生命そのものから学んだ」）などが語られている。

これに関して言えば、教え方が上手とか下手であるとか、あるいは単なる技術的な問題ではないと思う。ビデオ上映の際にサリバンの姿を見てほしい。これに関して、後日私の思うことを述べたい。

さらに大学に入学してからも、「毎日サリバン先生は私といっしょに教室に出て、全く言語に絶した忍耐をもって、先生たちの授業を全部指話してくださるうえに、自習時には私のために新しい語を辞書で引いたり、点字でない本や筆記は何度も読んでくださったのです。その仕事のわずらわしさはどうてい想像のおよぶところではありません」 (\* 5: p90)。

講義内容を指話するためにはサリバン自体も高度な知識がなければ不可能であろう。さらに、それは「先生の指が疲れきってしまって、もう一語もつづれなくなったとき……」 (\* 5: p112) というように激しいものであった。

では、ヘレンに高度な内容も綴りつけた Miracle Teacher サリバンの知識とはいかなるものであったか。サリバンが、ボストンのパーキンス学院に入学したときのことを述べた次の文を紹介する。

「はじめて学校へきたときのアニーの持ちものは、すりきれたもめんの服一まいと、つきはぎだらけの黒いくつしたが二そくだけでした。受持ちのモーア先生に、『サリバンさん、夜ねるときは、どうしますか。』ときかれたとき、『このままでねるんです。』アニーはへいきで答えました。

ねまきをきることさえしない、まずしいままでのくらしだったのです。けっしんして入ったものの、アニーには、つらいことがたくさんありました。中でも、同じクラスの、自分より五つも六つも年下の子が、目がふじゆうなのに、

国語でも、算数でも、ちゃんとできることでした。

アニーは、十四才にもなるのに、自分の名まえさえ書けないのです。また、ぎょうぎも、なに一つしらないのです。だからおどおどしたり、へまをししたりして、みんなからばかにされ、わらわれることもよくありました。」

(\*13: pp38-39)

14才まで文字すら書けなかったサリバンが、ヘレンを真に『学ぶ』ことへと導いたのである。いろいろ考えても文章ではどうしてもうまく書けないが、これが私がサリバンを取り上げたかった理由である。

繰り返せば、**言葉の学習を通して、先に書いたように言葉を知らずに荒れ狂っていたヘレンが大切な一枚のセーターを他人に渡せるようになったことと、そしてサリバンの生きざま、これを何とかテーマにしたかった。**

しかし、サリバンについての資料がほとんど入手できず、今回は、この第4節の補足説明でわずかに触れることしかできなかった。後日、必ずサリバンについての資料を集め、いかようにしてでも授業のテーマの一つにするつもりである。

それは、**サリバンが教えたのは言葉であるが、彼女が本当にヘレンに与えたものは先の一枚のセーターの心であり、「学ぶ」という意味も(将来)私の目指そうと思う語学学習及び英語の授業もこうしたものではないかと考えているからである。**

詳しくは補章-3参照。「心」を通して「心」を伴う言葉を教えたサリバンの生い立ちについての文とサリバンへのヘレンの思いの一文を参考までに以下掲載する。

映画 MIRACLE WORKER の一場面 (\* 21)



アニーはかなしい身の上の人でした。お父さんはさけのみで、いえによりつきません。アニーと弟のジミーをそだてるために、いっしんにはたらいていたお母さんも、つかれのあまり病気でなくなりました。二人のめんどうをみってくれる人がありません。みなしごととして、慈善病院にいられました。このとき、アニーは目の病気にかかり、弟のジミーもすっかり体をこわしていたのです。(\* 13 :p34)

ある日、とつぜん、弟が死んだという知らせをうけたのです。弟は、たった一人、病院の一室で、姉の名をさげびながらさびしく死んだのです。……アニーは、本当に一人ぼっちになりました。そのうえ目はだんだんわるくなるばかりでした。(\* 13: p36)

[ヘレンケラーのサリバンへの思い——『闇に光を』より]

私も私の教育は先生の不幸な一生によって完成されたのだと思います。先生はご自分の幼少のおりの生活の中に歓喜がなかったので、私の魂の中の空虚をよく理解してくださいました。……教師としての一生が先生の一生であり、そして、後に残される仕事をご自分の自叙伝そのものだといっておられました。思えば、先生は女性として最も尊い時代を私のために捧げてくだされ、今もなお日夜私のために献身して下さるのです。……先生によって私の友愛は実を結び、人類に奉仕したいという気持ちを強められたのであります。私の弱さと無力の中からごく徐々にではありましたが、先生は私の生活というものを打ち立ててくださったのであります。(\*5 : pp457-458)

### 《◆-3：資料-文章に心を込めて》

今回のテーマ「闇から光へ」を終わるに当たってもう一度考えてもらいたいことは、ヘレンケラーにとって人間となる上で必要不可欠であった言葉に該当するものは、現在の私たちにとっては何であるか、ということである。ヘレンケラーの内容に関するものの中から第Ⅱ部への課題として、94年度は障害を持つ人への教育権保障問題（\*14）（\*15）と識字教育に関する資料（\*16）を掲載したが、95年度からはそれらは口頭解説することにし、以下2つの文書のみを掲載する。

一つはヘレンケラーが最初にした手紙であり（◇資料-2参照）、もう一つは、言葉とは何かを考えてもらうために文字を知らなかった人が練習して書いた手紙の一文、即ち、野口英世の母の文章である（◇資料-1参照）。

この文章は、いかなる文章より説得力があると思われる。後に述べる私の目指す「心の英語」の原点はここにある。

〈◇資料-1〉字を知らなかった野口英世の母が、野口英世に死ぬまでにもう一度会いたいのので日本に帰ってくるように、必死で字を学び書いた手紙。この手紙を書くために字を学ぶ。

「……わたくしも、こころぼそくあります。  
ドかはやく。きてください。  
……はやくきてください。  
はやくきてください。はやくきてください。  
はやくきてください。いっしょ（一生）のたのみで。あります。  
にしさむいては。おか（押）み。  
ひかしさむいてわおかみ。しております。  
きたさむいてわおかみおります。みなみさむいてわおかんでおります。  
……なにおわすれても。これわすれません。  
さしん（写真）おみるト。いただいております。  
はやくきてください。いつくるト。  
おせ（教）てください。  
このへんち（返事）ちまちてをります。  
ねてもねむられません。」（\*17: pp121-122）

関連→『わたしゃそれでも生きていた』（\*18）、三浦綾子の『母』（\*19）等も参照。ここに語学学習の際に考えねばならぬことがある。

### 〈☆資料-2：ヘレンの最初の手紙 [1887年6月17日]〉

——ヘレンがwaterが分かったのが同年4月5日

“helen write anna george will give helen apple simpson will shoot bird jack will  
give helen stick of candy doctor will give mildred medicine mother will make mildred  
new dress. （\* 1: p111）

## 【参考文献】

- ( \* 1 ) HELEN KELLER, The Story of My life, A SIGNET CLASSIC
- ( \* 2 ) HELEN KELLER, THE STORY OF MY LIFE, YOHAN PEARL LIBRY
- ( \* 3 ) H. KELLER (西田実注解) 『THE SRORY OF MY LIFE』(成美堂) 1965 年
- ( \* 4 ) 東郷秀光・山本證編注、『ヘレン・ケラー、アラン・マーシャル作品集-Three Days to See』、(三友社)、1983 年
- ( \* 5 ) ヘレン・ケラー (岩崎武夫訳)、『わたしの生涯』、(角川文庫)、1966 年
- ( \* 6 ) Stewart and Anne Graff、『HELEN KELLER』、(KIRIHARA SHOTEN)、1979 年
- ( \* 7 ) HELEN KELLER, The Story of My Life, YOHAN LADDER COMICS
- ( \* 8 ) 伊東好次郎監修、『FIVE GREAT MEN AND WOMEN』、(数学研究社)
- ( \* 9 ) Stewart and Anne Graff、『読解ノート・HELEN KELLER』、(KIRIHARA SHOTEN)、1986 年
- ( \* 10 ) WILLIAM GIBSON, the miracle worker, ASAHI PRESS, 1974
- ( \* 11 ) 『HERALD FILM LIBRARY-4: 奇跡の人』、(ヘラルド出版)、1980 年
- ( \* 12 ) 松本恵子著、『世界伝記全集 7・ヘレン・ケラー』、(ポプラ社)、1971 年
- ( \* 13 ) 山口正重著、『ヘレン・ケラー』、(ポプラ社文庫)、1982 年
- ( \* 14 ) 朝日新聞 1993 年 12 月 9 日社説
- ( \* 15 ) 朝日新聞 1993 年 12 月 24 日社説
- ( \* 16 ) 「世界寺子屋運動」、(社団法人日本ユネスコ協会連盟)、1993 年 7 月
- ( \* 17 ) 渡辺淳一、『遠き落日 (下)』、(角川文庫)、1982 年
- ( \* 18 ) 東上高志編、『わたしゃそれでも生きていた』、(部落問題研究所)、1965 年  
→ pp12-16 の「わたしのおいたち」参照
- ( \* 19 ) 三浦綾子、『母』、角川書店、1992 年
- ( \* 20 ) ■ビデオ→ The Miracle Worker, WARNER HOME VIDEO
- ( \* 21 ) サリバンの手紙等→「COSMOS 1」、(SANYUSHA)、1987 年 pp82-83
- ( \* 22 ) Helen Elmira Waite, TEACHER OF LIGHT, YOHAN PUBLICATIONS, INC. 1980
- ( \* 23 ) 中尾町子原案、『ムッチャン』、(山口書店)、1982 年  
→ 同上書店より英文『Mutchan』も出版されている。
  
- ( \* 24 ) 写真、解説版は下記参照  
「20世紀・シネマ・パラダイス」  
[http://cinepara.iinaa.net/The\\_Miracle\\_Worker.html](http://cinepara.iinaa.net/The_Miracle_Worker.html)